

Normalization of Gay Surrogacy in Euro-American Culture.

ゲイ男性による代理出産のノーマライゼーション

Interviewee

Dr. Marcin Smietana

Q. 研究者としてのバックグラウンド、関心領域を教えてください。

ポーランドの出身でクラクフの大学を卒業し、バルセロナの大学で PhD を取得した。その後、UC Berkeley で最初のポストドクを経験した。2016年からケンブリッジ大学の Reproductive Research Group (ReproSoc) で Research Associate をしている。

スペイン、米国、英国で数年間にわたり、代理出産と養子で親になったゲイ男性について、質的、エスノグラフィー研究を実施してきた。エスノグラファーとして、男性にとって子どもを持つ意味は何かを明らかにした。社会学者として、ゲイの家族と血縁(kinship)の形成に対し、不平等や階層がどのように関与しているかにも興味がある。

ゲイコミュニティの調査の他に、Repro Soc の同僚とともに、より広い文脈でプロセスや不平等がどのような意味を持つかを考察している。ReproSoc のディレクターは血縁(kinship)やセクシュアリティ、人種の序列を考えるに際して、“社会を映し出す鏡としてリプロダクションを研究する”と主張している。

Q. Gay Surrogacy について行なったこれまでの研究の成果について教えてください。

ゲイ男性による代理出産の利用について次のような研究を行ってきた。

- 1)海外(米国、合法時代のインド)で代理出産を依頼したスペインのゲイ男性についての質的研究を行った。
- 2)米国をフィールドとして、ゲイ代理出産のエスノグラフィー研究を行った。米国で代理出産を依頼したアメリカ人だけでなく、ヨーロッパから米国に代理出産を依頼しに来たゲイ男性を含む。その他、代理母、ドナー、医師らも調査した。
- 3)英国に住むゲイ男性で、英国で利他的代理出産を依頼した人、または海外で商業的代理出産を依頼した人についての質的研究を行った。

これまでにわかったこととして、

- 1.高齢のゲイ男性にとって、(特に代理出産で)子どもを持つことは、一般的にイメージするのが難しいことだった。しかし、この20年くらいで、同性カップルの間で、この方法で父親になるということが徐々にイメージできるようになってきた。今日の若いゲイ男性にとってはまさにそうだ。英国の若いゲイ男性にとって、代理出産は、養子縁組や共同親に代わり、最初に検討されるオプションになっている。このように、代理出産で子どもを持つことが想像もできない時代から、テーブルの上で検討可能なものに変化してきたといえる。英国の代理出産の実施件数は、過去10年間で4倍にもなった。その大部分がゲイ男性によるもの。
- 2.ゲイ男性による代理出産には、伝統的な要素と革新的な要素の両面がある。女性の友人との共同親ではなく、彼らが想定しているのは、二人の親と子ども、という家族なので、何がしかは伝統的な要素がある。しかし、血縁関係(kinship ties)については新しく創造的な面もある。つま



り、代理母と交流したり、特には卵子ドナーとも交流したりもする。このことは、代理出産という取引には、経済的側面と感情的側面の両方があるということ。だから、親族関係(kinship)についても新旧両面の側面がある。(そもそも家族形成そのものがある程度伝統的なものだから)。

3.代理出産を利用するゲイ男性は、スティグマを恐れている。だから、それを減らすための戦略が採られる。例えば、人種の違いを少なくなるため、人種をマッチングするなど。親としての資格に疑問符がつくようなことは避けたいと考えている。

4.ゲイ男性による家族形成は、政治課題になってきている。彼らは、LGBTQ 家族に対する差別の解消に向けて、様々な活動をしており、親のグループ結成、法改正に向けた活動などに参加している。ゲイライツと結婚は、リンクしている。それは、ゲイの立場はヘテロとは異なるということ。ヘテロカップルは代理出産の利用に対して政治的に重きを置いていない。

Q. 文化による違いがありますか？

米国、インド、ロシアの研究者と、比較研究を行なった。それぞれの国ごとに次のような枠組みの違いがある。

- 1) 米国: 代理出産は経済と愛情の交換であり、それは依頼者、代理母、医師など全ての人に共有されている。
- 2) インド: 業界の枠組みと、代理母の枠組みにはズレがある。代理母にとっては生活を向上させるため。しかし彼女たちの声は表舞台には届いていない。
- 3) ロシア: 代理出産はすべての関係者にとって単なるビジネスとして理解されている。つまりは仕事だと捉えられている。

このような違いは、世界で統一した代理出産の規制を作ることが果たして可能なのか? という問いを生じさせる。

英国と米国にも顕著な違いがある。米国では商業モデルが、英国では利他的モデルが採用されている。米国では、通常二人の女性が関与する(卵子ドナーと代理母)。英国では、1/3 かそれ以上は、伝統的代理出産であり、一人の女性が卵子ドナーと代理母を兼ねている。米国では、伝統的代理出産はほとんど見られない。

それ以外の国々では代理出産は規制されていないことも多く、複雑な状況を生み出している。

Q. ゲイコミュニティの間で、代理出産による家族形成はどの程度浸透していますか？

米国では、代理出産はゲイコミュニティでは普通のことになっている。しかしそれも、州によって違う。カリフォルニアなど、ゲイ解放運動が盛んなゲイフレンドリーな地域に集中している。バリアはお金の問題だけ。15万ドルほどもかかる。だから多くの人はそのお金が払えない。払えない人は養子縁組を代わりに選ぶ。経済的なバリアを取り除こうという新しい試みもある。例えば **Men Having Babies (MHB)** では経済的支援を提供している。しかし、誰もがもらえるわけではない。

英国では昨年、ゲイカップルの体外受精に対して初めて NHS の助成が行われることになった。米国では、政府による公的医療保険制度は存在しない。だから非常に風景が異なっている。英国では代理出産の費用は 15,000-60,000 ポンドと幅があるものの、それでも米国よりは安い。

西・北・南ヨーロッパでは、代理出産やゲイペアレンティングは合法にはなっていない。しかし、海外での代理出産は



許容されている。フランス、スペイン、ドイツ、スロバキアのゲイカップルにインタビューをしたが、彼らにとって海外で代理出産を依頼して、子どもを母国に連れて帰った経験はポジティブなものだ。オランダは、ゲイカップルに対して代理出産のアクセスを限定的に認めている唯一の国。しかし代理出産のコミュニティは小さい。それ以外の国では、ヘテロカップルに対してのみ法的に認められている。だから、ヨーロッパのゲイ男性にとって、米国かそれ以外の場所に行くのが唯一の選択肢になっている。英国は例外的な場所で代理出産の大きなコミュニティがある。

代理出産はますます普通のことになってきている。つまり多くの人にとってスティグマがなくなっているということ。ヨーロッパ大陸では、ゆっくりとオープンになってきている。スペインやイタリアでは、ゲイコミュニティやフェミニストの間で論争がある。これらの国のフェミニストは代理出産に反対しているから。

スイスでは同性婚についての国民投票がつい先日に行われた。同性婚は2/3の賛成により認められた。移民の権利、政府助成の体外受精へのアクセスがレズビアン女性に対して認められ、ゲイとレズビアンに対して養子縁組の権利が認められた。しかし代理出産へのアクセス権はゲイ男性に認められなかった。代理出産については遅れている。

西欧世界では、代理出産と養子縁組が最も広く行われている。経済的要因が絡んでいる。米国での代理出産を希望する人たち(アメリカ市民を含め)にとって金銭的バリアの問題がある。養子縁組はもっと安価なので、代理出産を金銭的理由で依頼できない人にとっては有力なオルタナティブとなる。

法規制も関係している。例えば、英国では利他的代理出産が合法で、幅広く行われている。カップルは多額のお金を支払うが、それでも米国に比べればまし。そのことが、代理出産の普及率に影響している。

文化的な要因もある。共同親はずっと前からあったが、ゲイ男性にとって女性の友人との共同親はあまり人気がなかった。それは父親が疎外されてしまうのではないかという心配から。共同親はオランダやベルギー、英国でよく見られる。Pride Angel という有名な組織があり、共同親のアレンジをサポートしている。

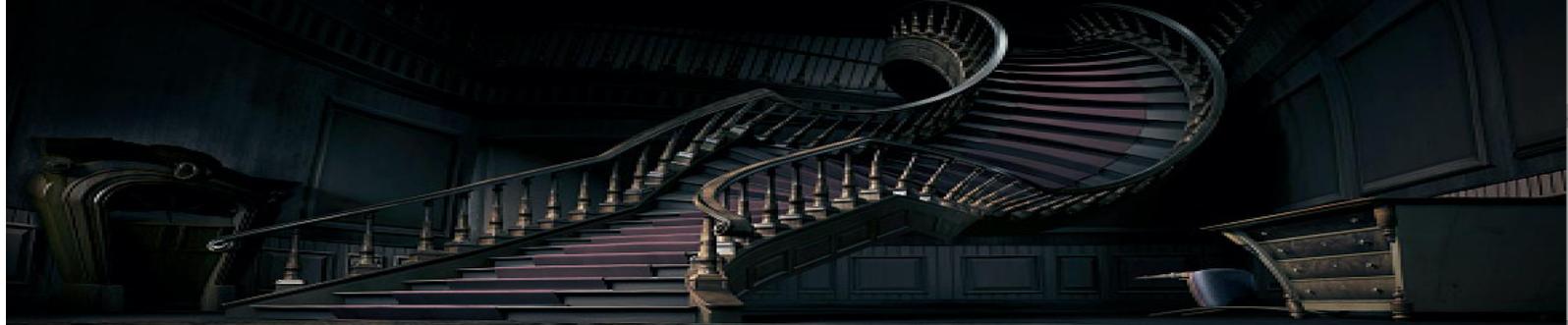
ポーランドと東ヨーロッパでは、共同親は唯一の選択肢になっている。というのはその地域ではそれ以外に法的に認められたアクセス権はないから。

政治的信念や社会階層もまた、この問題に非常にダイナミックな仕方で影響を与えている。

Q. ゲイコミュニティのなかで、代理出産で親になることに対して懐疑的な人はいますか？

もちろん、そういう人もいる。単純に子どもを持つことには興味がないゲイ男性もいる。これがおそらくは大半。しかし、彼らは子どもが欲しいというゲイ男性に対して批判的というわけではない。ただ、そういうことを身近に感じないというだけ。それ以外に、反対ではないが、経済的理由やそれ以外の困難により、実行することができない人たちがいる。

しかし、家族を作ることに反対する人もいる。ブリュッセルでそのような場面を目撃したことがある。ブリュッセルで Men Having Babies の会議 “Parenting Options for Gay Men in Europe” が開催されたとき、自分も出席していた。この会議



に反対の人たちが出席していた。フェミニストやクイアの組織だった。反対しているか、あるいは支持していないかのどちらかの意見だった。しかし見方を変えれば、そこには200人以上のゲイ男性が出席しており、それ以外の組織からは支持を得ていたということ。

東ヨーロッパなどの国では、ゲイ男性の家族形成については議論すらされていない。これらの社会ではその準備がない。

全般的に、ゲイコミュニティの中では家族形成に関してコンセンサスができてきている。米国では、MHBが、Our Family Coalitionと共催でイベントをやっている。Our Family Coalitionは、法律の改正を最初に主張した団体で、LGBTQの家族に対するサポートも提供している。ゲイコミュニティではこのイシューを幅広く支持している。

Q. ゲイカップルにとって、米国で代理出産を依頼することは、倫理的に望ましい選択肢となっていますか？

一概に答えられない。インタビュー対象者の多くが、北米と、インドやタイといった他の地域とを比べて、自分の選択が望ましいと答えていた。彼らにとってその方が倫理的に思えるということ。しかし、米国以外の国に行った人にあまり話を聞いていないので、この印象にはバイアスがある。

米国がより倫理的な選択肢だと彼らが考えている理由は、1)代理母と関係を継続できる。子どもに自分の出自についてのストーリーを提供できる。子どもに代理母を会わせることもできる。2)文化的背景が同じ。3)言語バリアがない。4)米国の代理母は強い自己決定の力を持っている。

英国のゲイ男性は、利他的モデルが良いと話していた。その理由は、代理母と

の関係があり、非常に親しいからというもの。距離が離れていないので、友人のように付き合える。それが彼らにとって倫理的なのだそうだ。

金銭的補償も、もう一つの大きな問題。代理母に支払うのが倫理的だという人がいる一方で、それに反対する人もいる。しかし、インタビューをしたほとんどの人が何らかの対価を支払うことを支持していた。それは、代理母の骨折り(labor)に対して、支払わないことは正しくないと感じられるからというもの。

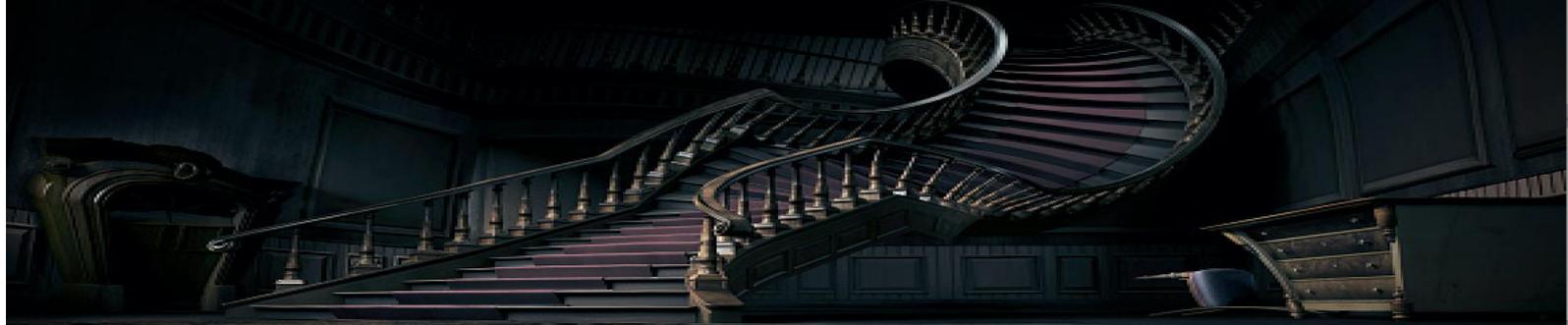
Q. 東南アジアや東ヨーロッパなど、代理母が搾取されていると批判されている地域で代理出産を依頼したゲイカップルは、そのことをどのように正当化しますか？

事前に十分な情報収集を行なって、自分たちの選択は倫理的なものだったと考えている人たちもいる。しかし、現実には、現地の状況がどうか確信をもって言うことはできない。直接見たわけではないし、言葉のバリアがあるから。こうしたカップルは、アメリカの商業モデルを批判する。そして、代わりにインドでは貧しい人を助けることができると主張する。しかし、研究でわかっているのは、現実には起こっていることは、単に貧しい人を助けるというような単純なものではないということ。

いずれにしても、何が倫理的で何が倫理的でないか、などと、倫理的な正当化がさかんに行われている。

Q. 卵子ドナーは匿名が選ばれるケースが多いでしょうか？

この問題に関して、ゲイ男性の間に分裂がある。一方では、匿名ドナーを好む人たちがいる。それはドナーの存在が父



親の役割を脅かすのではないかという懸念があるから。しかしこれは少数派。米国を選ぶ男性の一部はこの理由がある。精子ドナーを使うレズビアンの間にも似たような議論がある。

大部分の人が known donor を好んでいる。ゲイ男性の親は、子どもたちには、遺伝的出自や健康上のバックグラウンドを知ってほしいと思っている。しかし、クリニックでは匿名ドナーしか提供していないところも多い。だから最終的に妥協して known donor を諦めるカップルもいる。

Q. Gay Surrogacy の父親は、代理母や卵子ドナーとどのような境界を作っていますか？ 交流はさかんですか？

大半は、代理母とコンタクトをとっているが、卵子ドナーとは会っていない。特に匿名ドナーがデフォルトの米国では、その傾向が強い。それは、金銭的インセンティブが大きな要因になっている業界の都合による影響。卵子提供は、ドナーの健康に対して長期的な影響を与える可能性がある。だから経済的なインセンティブがドナーになる主要な理由になっている。

半匿名のドナーもいる。半匿名の場合、年に1回、コンタクトすることができるとか、健康問題が生じた時には問い合わせができるなど、ドナーによっていろいろ。

二人の女性が関わる代理出産では、その事実それ自体によって境界を作ることが可能。国境を超えた代理出産では、別の意味でバリアを作ることができる。商業モデルでは、契約書やお金もまた、バリアになる。それは、経済的な脱血縁 (economic de-kinning)、つまり血縁をお金で買うという意味がある。利他的なモデルはその正反対。英国では、利他的モデ

ルにより、血縁の結びつき (kinship ties) が効果的に促進されている。

Q. 精子提供で生まれた人たちの中には、技術そのものに反対する声もあるようです。Gay Surrogacy について将来、同様のことが起こる可能性がありますか？

もちろん、どのようなことでも起こりうる。ただ、自分としてはそのようなことは起こらないと考えている。心理学の研究によれば、代理出産で生まれた子どもたちは、遺伝的出自について好奇心を抱いているが、家族を変更したいと思っている訳ではない。養子の子どもたちについても同じ結果が出ている。だから子どもたちは代理出産で作られた家族を拒絶しているわけではないということ。しかし、もっと研究が必要だ。

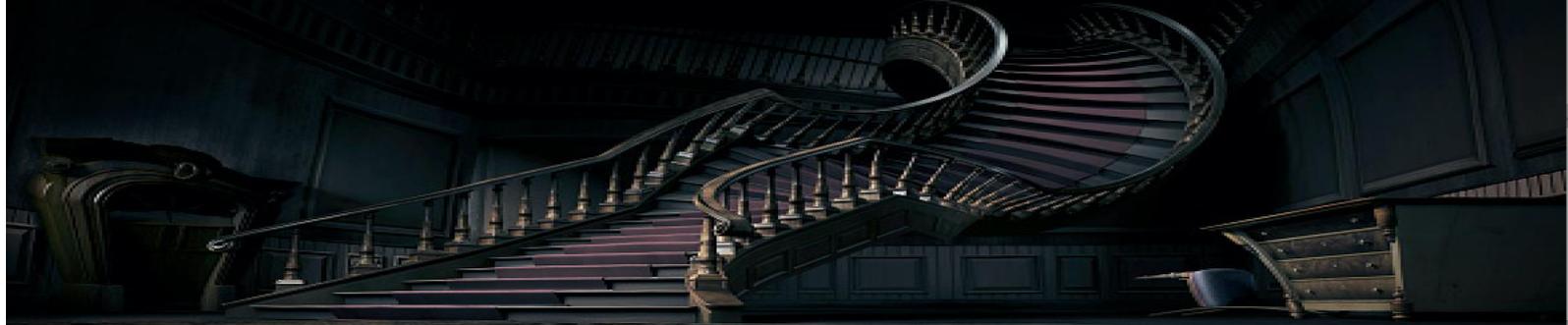
代理出産で生まれた第一世代の子どもたちがやっと年頃になったばかり。だからこれは未開拓の分野だ。

Q. ゲイカップルが代理出産を依頼できる国が少なくなっています。今後、米国で代理出産を依頼するゲイカップルが増えていくと思いますか？

そこまでは増えないと思う。金銭的なバリアがあるから。しかし、少しは増えていくだろう。代理出産に関するイベントはポピュラーになるだろう。例えば MHB は、新しいマーケットとなる台湾で初めてのカンファレンスを開催した。だから米国で代理出産を依頼する台湾人がこれから増えていくだろう。

Q. 子宮移植について、ゲイカップルの間でどの程度ニーズがあると思いますか？

現在のところ、需要は少ないと思う。その技術はまだ新しいものだから。もし、現実のものになったとき、興味をも



つ人はいるかもしれない。現時点ではまだ非現実的すぎる。子宮移植ができるようになったら、代理出産のときと同じような分裂が生じるのではないかと思う。つまり、それはゲイの親にとってはより脅威がなく安心できるものだが、彼らにはアクセスするのが難しいというような問題だ。

他方では、人工子宮のような考えは好きではない人たちも出てくる。彼らは、関係性を求めているから。

色々な考えや地域ごとの枠組みが生じてくるだろう。

Q. 異性カップルに対して、子どもをもつべきだという考え方が強くあります。同性カップルに関して、将来このようなプレッシャーは生じるのでしょうか？

子どもを持つことは、同性カップルにとってはまだ規範にはなっていない。この意味で、まだまだ特異なコミュニティだといえる。このコミュニティでは、たくさんの選択肢が最近になってやっと利用できるようになってきている。もちろん、そういうプレッシャーが出来上がっていくリスクはある。“善良なゲイ男性になるためには一定の水準を満たさなければならない”といったような。今はまだ不安定なステージにいる。

Q. LGBTQの家族が受けられる福祉に関して、異性カップルの親の場合と比べて、違いはあるのでしょうか？

地域によって異なる。米国では、健康保険会社が、LGBTQの親に対する給付金を含めるようになってきている。しかしそれは特定の保険会社に偏っている。レズビアン女性たちは、体外受精の助成を得るためにこの問題と格闘してきた。

国が助成するヘルスケアについては論争がある。スペイン、フランス、スイス、英国ではレズビアン女性に対するIVF費用の助成が認められている。しかし、代理出産については、助成はない。スコットランドはある程度まで代理出産への給付が認められた最初の例だと思う。この状況は、父親の育児休暇取得についての困難と似ているかもしれない。代理出産で父親になった人がこの権利を行使するのは難しい状況がある。

Q. ゲイ代理出産が浸透することで、世界の代理出産の規制や慣行が変化するでしょうか？

良い質問だが、答えるのが難しい。一方では、米国、英国、カナダを見ると、代理出産はますます普通のことになってきていると思う。例えば、Kent大学のDr.Kirsty Horseyによる研究では、英国の代理出産は、過去10年間ほどで4倍にもなった。他方、代理出産が禁止されているヨーロッパの国々で状況がどのように変化していくか、予測するのが難しい。例えば最近ではスイスの例がある。しかし、そのように禁止されている国からでも、男性や女性が海外で代理出産を依頼して子どもを母国に連れて帰っており、ノーマライゼーションが進んでいると言える。だからこの先何年かで、代理出産はさらに受容されていくだろう。

Q. ゲイの父親を持つ子どもたちには、家庭の内と外の価値の矛盾や葛藤にどのように対処していますか？

現実には、そんなに難しいことではない。少なくとも、私が研究をした比較的ゲイフレンドリーなコンテキストの中では。スペインの研究では、家庭と学校では、支配的なジェンダーモデルが異なっ



ていたにもかかわらず。つまり、家庭では、より進歩的で、学校ではより伝統的だということ。実際には、子供達は、周りにあるジェンダーモデルを一つのパッチワークモデル(patchwork model)の中うまく収めることができる。子どもたちは、家庭からのみ、または学校からのみ学ぶわけではない。父親や、拡大家族、学校の友達や先生からも学んでいる。

インタビューした父親たちは、リベラルで進歩的でゲイフレンドリーな学校を選んでいて。だから子どもたちは、悪口を言われたりすることはない。リベラルな学校のコミュニティはオープンで、そのことに驚かれたり、また一部の友達から質問をされることはあっても、悪口を言われたりすることはないし、家庭と学校の間には矛盾はない。しかし、よりゲイフレンドリーではない環境では、どうかはわからない。

Q. 現在進めている研究、今後の研究テーマについて。

生殖についてより広い視野で研究している同僚とともに実施した英国のゲイ代理出産の研究をちょうど終えたところ。

代理出産に代理母や卵子ドナーとして参加することを考えている女性たちについて検討すべきだと思う。そのような女性の多くは、保険を持っていない(米国やインドなど)。普遍的なヘルスケアはない。だから保険に頼るしかない。良心的なエージェントやクリニックはヘルスケアについて、妊娠前、妊娠中、妊娠後と、きちんとアドバイスをする。しかしそういうエージェントやクリニックは高額だ。女性の権利を考えていないところはもっと安い。依頼者と女性の権利をきちんと考えなければならない。

ゲイ代理出産は、特定の歴史的時期に生じたものだ。最近のゲイライツ、ゲイ

解放、結婚や血縁についての認識に変化が生じた歴史と関係している。2、30年前には、こうした変化をイメージすることは不可能だった。今でもまだ新しい。過去のモタモタしたあゆみの中でなかなか成し遂げられなかった記憶が残っているので、そのことにまだ多少の矜持が残っている。

生殖の正義(Reproductive Justice)について考えることも大事。ゲイ代理出産は、真空に発生しているものではない。それは、不平等が存在する世界で起こっていることだ。だから知らないうちにその不平等の渦の中に組み込まれていることもある。依頼者と代理母、ドナーの権利について考えなければならない。

現在、本の出版の準備を進めている。2022年の終わりか2023年の初め頃に出版される。“Transatlantic Transactions- gay men, surrogacy and reproductive justice”というタイトルになる予定。

LGBTQ コミュニティのためにも活動している。クイア、トランス家族、活動家のコミュニティの代表をしている。生殖についての捉え方がどのように変化しているかについて、注意深く彼らの経験や視点を分析している。

(2021年9月)



Dr. Marcin Smietana [Link](#)

ポーランド出身。ケンブリッジ大学 Reproductive Sociology Research Group(ReproSoc)で助教をしている。ゲイ男性の代理出産について、スペイン、英国、米国、ヨーロッパ各地に住む多数のゲイ男性にインタビューを行ってきた。生殖におけるヒエラルキーの問題にも関心を払っている。

書籍: Transatlantic Transactions- Gay Men, Surrogacy and Reproductive Justice. (近刊)

論文

- Marcin Smietana 2019 Procreative consciousness in a global market: gay men's paths to surrogacy in the USA. Reproductive Biomedicine & Society Online7: 101-111.
- Marcin Smietana 2018 Making and breaking families – reading queer reproductions, stratified reproduction and reproductive justice together. Reproductive Biomedicine & Society Online7: 112-130.
- Marcin Smietana 2017 Affective De-Commodifying, Economic De-Kinning: Surrogates' and Gay Fathers' Narratives in U.S. Surrogacy. Sociological Research Online 22(2): 163-175.
- Marcin Smietana 2017 Families like We'd always known? Spanish Gay Fathers' Normalization Narratives in Transnational Surrogacy. Assisted Reproduction Across Borders: Feminist Perspectives on Normalizations, Disruptions and Transmissions.3: 49-60.